様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年 5 月 28 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間　2007　～　2009
課題番号：19520328
研究課題名（和文）　言語における省略現象についてのテクスト言語学的対照研究

研究課題名（英文）Textlinguistic studies on the ellipsis phenomenon: a contrastive analysis between German and Japanaese

研究代表者　田中　愼　　（TANAKA　SHIN　）
千葉大学・言語教育センター・准教授
研究者番号：50236593

研究成果の概要（和文）：本研究は，言語における「省略」現象について，テクスト言語学的な視点から捉えなおすことによって，言語間に観察される「省略」の度合いの差について統一的な説明を与える試みを行った。その際，(1)「省略」は，対象を言語化する際のストラテジーの違いの結果生じるものであること，(2) そのストラテジーは，省略だけでなく，それぞれの言語の文法全体を規定するものである，ということを示した。

研究成果の概要（英文）：This textlinguistic study provides a new approach to “ellipsis phenomena”, which occur with different frequency among languages. The general findings from the investigation are as follows:
1. The ellipsis phenomena result from different strategies for reference in the text, deixis and anaphor. They are realized language specifically.
2. These strategies determine not only occurrences of the ellipsis phenomena, but also the whole grammatical structure of the language concerned.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
19 年度	500,000	150,000	650,000
20 年度	500,000	150,000	650,000
21 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総　計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・独語学
キーワード：言語学，独語，テクスト，省略，ダイクシス，アナファー

１．研究開始当初の背景
本計画研究では，主に日本語とドイツ語におけるさまざまな「省略」現象を扱った。
言語学の記述の中心になっているヨーロッパ諸語において，多くの場合，主語は義務的に生じるものであり，また主語以外の項，例えば直接目的語なども述語により厳しい制限を受けており，その結果簡単には「省略」できないものとされる。一方で日本語は，一般に主語を中心として「省略」の多い言語とされ

る。このことは，一般に完全な文を記述の出発点とすることの多い統語論的な記述においてもっとも顕著に観察されるが，一方でいわゆる「復元可能性」をテーマとする語用論的なアプローチにおいても暗黙のうちに「省略の多さ」が想定されていることは少なくない。Nariyama(2003)は日本語の「省略」について，指示のトラッキング（ReferenceTracking）と言う観点から詳細な記述を行っているが，この際にも「何かが欠けているが復元が可能である」ということが議論の出発点となっている。
Nishina(2006)では，日本語の複合述語構文について「（本来の）文の等位的結合形式の縮約」と捉え類型論的な記述を行っているが，この場合にも「本来の形からの縮約（省略）」という図式が適用されていると言えるだろう。一方で，これらの「省略」現象を「完全なものからの欠落」ではなく「もともとないもの」と捉えることが可能である。池上（2000）は，「コミュニケーション機能的な違い」による省略現象の現れの違いを指摘しているが，日本語において「省略」がより多く観察されるのは，言語使用におけるストラテジーの違いに起因していると考えることができるだろう。

２．研究の目的
上記のような背景のもと本研究では，「省略がある」とする文統語的な立場を踏まえつつ，「省略は日本語に特別多くはない」とする機能的なアプローチの可能性を「テクスト構成の違い」を中心に据え記述することを試みる。研究代表者は，数年来，「(文）統語構造の違いがテクスト構成の違いに大きな影響を及ぼす」という仮説のもとさまざまな現象を分析してきたが，本研究における「省略」現象においても同様に，個別言語的な統語的な特徴がテクスト構成の特性を決定し，そのテクスト生成，理解プロセスが「省略」現象をもたらすという仮説を組み立てることができる。本研究では，この仮説を検証することを目的としている。研究は，主に日本語，ドイツ語の対照研究によって行うこととする。

３．研究の方法
本計画研究は，申請者が単独で遂行する形をとっているが，多くのテーマ的に関連する海外の研究者，研究グループと共同して研究を進めることになる。
以下に主だった海外共同研究者と，その具体的な共同研究のテーマを記載する。
ーミュンヘン大学グループ
Elisabeth Leiss教授（ミュンヘン大学哲学部ドイツ語言語学講座）
Werner Abraham教授（ウィーン大学・グローニンゲン大学名誉教授，ミュンヘン在住）
従来から田中は，同大学の研究グループと共同研究を進めてきたが，この計画研究の枠組みでは，同大学でLeiss教授を中心にして（講座所属の博士学生らとともに）企画されている「日本語，ドイツ語の指示表現の対照についての計画研究」と共同研究の形を取る予定である。この際，共同研究の中心となるのは，日本語，ドイツ語の指示システムの比較対照である。これにより，本研究での「省略」現象を，「指示のストラテジー」の具現化の一つの形として捉えるという仮説を提案する。ミュンヘン大学当研究グループでは，Leiss(1992, 2000, 2006), Abraham(2003)など,ドイツ語の指示方法に関する共時的および通時的な研究が集中的に行われている。
ーその他の海外共同研究者
Sascha Felix教授（パッサウ大学哲学部一般言語学講座）
Patrick Kühnel博士　（パッサウ大学哲学部一般言語学講座助手）
Felix教授は，Felix(2003, 1999)などで，日本語の項構造の語用論的特性について論じているが，この特性は，本計画研究のテーマである「省略」現象を構造的に支えているものとかんがえることができる。また，東アジア言語研究の専門家であるKühnel氏とは氏が研究滞在で申請者の大学に滞在していた以来，日本語，ドイツ語の指示システムのメカニズムについて国内外で共同での研究を多く行っている（たとえばTanaka/Kühnel (2004)）。また氏の博士論文であるKühnel(2006)は東アジア言語のトピックによる指示システムについての研究であるが，これは本計画研究のテーマである「省略」現象と密接な関係にあるものと考えることができる。
以上のように，日独共同研究という体制を整備しつつ，研究を進めることになるが，この共同研究の前提となるのが，経験的資料に基づく対象の記述であることは言うまでもない。本研究では，ドイツ語，日本語の省略現象について，実際のテクストデータを分析し，検証を進める。その際，日本語，ドイツ語を中心としてデータを集めるが，それぞれの言語のコーパスデータを分析することを出発点とする。この際に，何が「省略」されているのかについての分析は，個々の文の構造を基本として分析するのではなく「テクスト」全体としてどのように指示が行われているかについての観点からの分析を行う。

４．研究成果
本研究は，言語における「省略」現象につい

てテクスト言語学的な視点から捉えなおすことによって，言語間に観察される「省略の度合い」の差について統一的な説明を与える試みを行った。これについて，三年間にわたる計画研究により，以下に挙げる主に 2 つの点について大きな成果を得ることできた。以下に順を追って説明したい。

（1）「テクスト」を構成するストラテジーとしての省略現象の記述

日独両言語の「省略」現象について，従来の文レベルからの統語的アプローチや，「完全な文」を前提とし，その上で「欠けている」指示対象の追跡を引き起こすトリガーとしての省略要素の働きの方法論からは，「省略要素の復元」が，省略の多いとされる言語（例えば日本語）において頻繁にかつ正確に行われることを説明できないでいた。本研究は，省略現象を指示のストラテジーの表れであると考え，その観点から，ヨーロッパ言語，とりわけドイツ語の代名詞の使用との平行性，相違点を捉えなおすことを試みた。
その際，言語の「指示」(reference)を達成する場として，テクスト（文章・談話）という文脈を設定した。これは，「指示行為」は，単独の文で行われることはむしろ稀であり，また，談話状況を考慮する最低限のレベルは，テクストであるということからのものである。テクストにおける指示のストラテジーとして，本研究では 2 つの概念を導入した：ダイクシス（直示）とアナファー（照応）の 2 つの概念である。この 2 つの概念は，言語によりそれぞれ異なった際立ちを見せるが，それが当該言語の文法に大きな影響を与えている。
この理論的論考の枠組みで，「省略」現象を扱った。いわゆる省略現象は，文法的にかなり定型的な一部の「統語的省略」を除くと，おおむね，ダイクシス空間においてすでに焦点化されている salient な要素が省略される傾向にある。ダイクシスを単に「表現の集まり」を表すものではなく，「指示のストラテジー」として捉えた場合，省略はダイクシス的な現象であるということが言える（その際，いわゆるテクスト内ダイクシス（テクストダイクシスも含まれる）。一方，テクスト構成原理のもう一つの軸としてアナファーが挙げられるが，これも単に「代名詞表現」の集合としてではなく，一定の統語的な枠組みにおいて機能する指示のストラテジーとして見なすことができる。このダイクシス，アナファーの両機能は，先述のとおり異なった分布を見せる。日本語は，ダイクシス指示を基本とする典型的な「ダイクシス言語」と位置づけられるのに対し，英語は，おもにアナファーがテクストの結束性を形作り，また指示行為全体にも支配的な「アナファー言語」と想定される。この分類によると，ドイツ語は，これらの言語の中間的な性質を帯び，テクストジャンル，文体によって両者のストラテジーを使い分ける「ダイクシス - アナファー言語」となる。「省略」の頻度の違いは，このテクスト指示のストラテジーの際立ちの違いに起因し，「ダイクシス言語」において顕著に多くの省略が観察される。一方で，これらの違いは，あくまでも相対的な差であり，言語では一般に，多かれ少なかれダイクシス，アナファーの両ストラテジーが用いられる。
この「省略」現象への新たなアプローチについては，2007 年，2009 年度にわたり国内外の学会，研究会で研究発表を行い（下記「発表論文等」の欄を参照），国内外の研究者と議論を重ねた。
また，「省略」研究を通して，研究後年度では，その舞台である，テクスト構造そのものへの探求に関心は向かった。次項で，その展開について簡単に述べることとする。

（2）「テクスト構成のストラテジー」を中心とした文法記述の試み

「省略」現象の言語間の違いは，先に述べた 2 つの指示ストラテジーがもたらす一つの現れに過ぎない。この本研究の前半で提示された，『「省略」現象を決定づけている原理は汎文法的に見られるものである』という仮説に基づき，本研究では，語，文，テクスト，談話の各レベルにおけるドイツ語の文法を記述することを試みた。研究では，時間的制約の中，以下のような諸現象について扱った。

① 指示ストラテジーと言語モデル
② 人称
③ 主語－述語構造
④ 主題－題述構造
⑤ 否定詞 nicht
⑥ 不変化詞 auch
⑦ テクスト構造
⑧ 応答表現の構造
⑨ 数・性の概念
⑩ 冠詞の機能
⑪ 形容詞の語彙
⑫ 擬音語・擬態語の機能

また，指示のストラテジーに基づく文法記述のさらなる発展の方向性として以下のような現象を試験的に扱った。

⑬ 指示ストラテジーとしての時制
⑭ 指示ストラテジーとモダリティ
⑮ 指示ストラテジーの史的展開
⑯ 指示ストラテジーとテクストジャンル

これらの研究成果は，とりわけ，下記掲載の博士論文「Deixis und Anaphorik: Referenzstrategien im Text, Satz und Wort」にその成果をまとめた。また国内外の学会，研究会において，その成果を報告し，議論を重ねた。これらの議論をもとに，ドイツの研究者（ミュンヘン大学 Leiss 教授，ハンブルク大学 Redder 教授，フランクフルト大学 Fery 教授，ベルリン自由大学 Ehlich 名誉教授，ベルリンフンボルト大学 Donhauser 教授など）との間に，さらなる国際共同研究の機運が高まっている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 4 件）

① 田中　愼(2009)：『Pro und contra Korpus: 心理表現の人称をめぐって』. 田中愼編. コーパスをめぐって　ー心理・知覚表現の分析.日本独文学会研究叢書 067. 31−40. 査読なし

② Tanaka, Shin (2008): The Aspect-Modality-Link in Japanese: The case of the evaluating sentence. Werner Abraham / Elisabeth Leiss (ed.) Modality-Aspect Interfaces. Implications and typological solutions. TSL 79. Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins. 309-327 **査読有り**

③ 田中　愼(2008)：『代名詞使用から見たドイツ語テクスト構成のしくみ』. 三瓶裕文・成田節編. ドイツ語を考える. ことばについての小論集. 東京:三修社. 202-211

④ Tanaka, Shin (2008): Kontra Ellipse: So viel wie nötig, so wenig wie möglich. 日本独文学会編. ドイツ文学 127 号(Neue Beiträge zur Germanistik Band7 Heft 1). 東京. 46-59 **査読有り**

〔学会発表〕（計 9 件）

① 田中　愼　ダイクシスとアナファー：言語行動における 2 つのストラテジーと文法. 第 16 回「社会と行為から見たドイツ語」研究会. 学習院大学. 2010 年 3 月 19 日.

② Tanaka, Shin Deixis und Anaphorik als Konzeptionalisierungsmuster. Die 9. Internationale Tagung zur Funktionalen Pragmatik. Freie Universität Berlin. 2009 年 11 月 5 日

③ Tanaka, Shin NP-Spaltung als (zweite) Praedikation. 広島大学総合科学部ワークショップ Syntax-Prosodie-Interface im nominalen Bereich. 2009 年 9 月 2 日

④ Tanaka, Shin Deixis und Anaphorik: Referenzstrategien im Text, Satz und Wort. Disputationsvortrag. Universität München. 2009 年 7 月 10 日

⑤ 田中　愼　主節の構造: 談話との接点としてのV2. 広島大学総合科学部プロジェクト「言語と情報研究」第 22 回公開セミナー. 2009 年 2 月　28 日

⑥ 田中　愼　pro und contra Korpus：**心理表現の人称をめぐって**. 2008 年度日本独文学会秋季研究発表会. シンポジウム「コーパスをめぐって：心理・知覚表現の分析」. 岡山大学. 2008 年 10 月 13 日

⑦ Tanaka, Shin Rezeption der „Prädikation“: „Subjekt – Prädikat“ und „Topik – Kommentar“ . Asiataische Germanistentagung 2008. 金沢星稜大学. 2008 年 8 月 27 日

⑧ 田中　愼　左周辺部(left periphery)の機能：談話と文の接点. 2008 年度日本独文学会春季研究発表会. シンポジウム「Satzmodus と Satzstruktur ― 構造と意味のインターフェースをめぐって」. 立教大学. 2008 年 6 月 14 日

⑨ 田中　愼　Zum Phänomen "Ellipse". 第 35 回日本独文学会言語学ゼミナール. 葉山. 2007 年 8 月 29 日

〔図書〕（計 2 件）

① 田中 愼(編), 日本独文学会, コーパスをめぐってー心理・知覚表現の分析, 2009 年, 70

② Shin Tanaka, Ludwig-Maximilian-

Universität München, Deixis und Anaphorik: Referenzstrategien im Text, Satz und Wort, 2009, 265

６．研究組織

(1)研究代表者

田中　愼（Tanaka Shin）
千葉大学・言語教育センター・准教授
研究者番号：50236593